




め、治癒は見込めない<sup>1)</sup>ものです(表1)。転移性皮膚腫瘍は、以前は比較的まれでした。しかし近年、化学療法、放射線療法あるいは免疫療法などの進歩に伴いがん患者の生存率が向上し、それにより転移性皮膚腫瘍の報告も増加している<sup>2)</sup>といわれています。現在、悪性腫瘍のうち皮膚転移するものは全体の3～5%程度との報告がありますが、患者のQOL (quality of life) に大きく影響を与えるものとして注目されています。転移性皮膚腫瘍の治療法は、原疾患の治療をすることです。しかし、転移であることから手術療法は適応となることは少なく、放射線療法や化学療法または併用、そしてホルモン療法が適応となります。これらによって効果が得られれば腫瘍

は縮小することが期待できますが、多くの場合完全消失させることは非常に困難です。

### 皮膚表出がんの症状

皮膚にがんが露出し徐々に増大して潰瘍化した場合にはケアが必要です(図1)。皮膚に表出する部位や症状はさまざま、ケア方法は依然として確立されていません。その理由は、部位、大きさや形状、出血や滲出液の量、疼痛の訴え方など個々の症状で対応方法が異なるからです。これらは、患者のみならず家族をも悩ます症状で、いずれも日常生活では管理に難渋し苦痛となるものです。

表1 転移性皮膚腫瘍の分類

分類	臨床像	全体の割合	特徴
結節型		75%	突然生じて急速に増大する硬い結節で、通常疼痛はない。直径3cm未満が多い。肺・胃がんなどの血行転移
(丹毒様がん) 炎症型		10～20%	丹毒に似て境界不明瞭の発赤、腫脹、熱感、疼痛を伴う。蜂窩織炎や带状疱疹、接触性皮膚炎との鑑別が必要。リンパ行性転移で乳がんが多い
(鑑状がん) 板状型		10%	丘疹や結節が融合して板状硬結をきたす。乳がんが多い

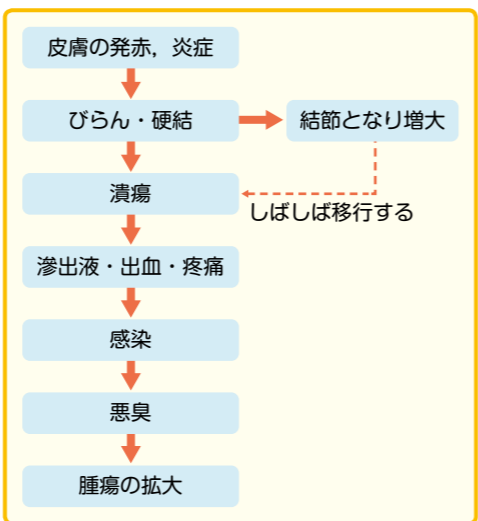


図1 皮膚表出がんの経過



図2 皮膚表出がんの一例

表2 疼痛の要因と特徴(文献<sup>3)</sup>より引用改変)

疼痛の要因	特徴
創傷自体の疼痛	炎症や腫瘍からの滲出液、被覆材などが創傷の神経末端の露出部へ接触
治療や処置に起因する疼痛	処置の際に被覆材の除去、洗浄などの摩擦
がんの浸潤に伴う疼痛	臓器や神経への浸潤
外的刺激に伴う疼痛	腋窩や鼠径部など、体動により摩擦が加わる位置の創傷

### 疼痛

疼痛は、個々の自覚症状であり、それを測るものは患者の訴えしかありません。しかし、その疼痛の性質を十分に分析し、どのような対応が必要なのかをアセスメントする必要があります(表2)。

疼痛の誘発因子は、①創処置、②炎症や感染、③がんの浸潤による周囲組織への圧迫、④創周囲のスキントラブル、⑤予期的な痛みなど<sup>4)</sup>があります。

鎮痛薬はNSAIDs やオピオイドを使用したり、しびれや疼くような痛みの場合には抗うつ薬や抗痙攣薬などの鎮痛補助薬を併用したりします。鎮痛薬の使用頻度やタイミングは、疼痛の状況で常に除痛が必要か、処置の際に必要ななどを検討します。

### 処置のポイント

- 剥離刺激を少なくするために、油性基剤の軟膏を塗布する
- ドレッシング材の除去時は、濡らしながらゆっくりと剥がす
- 創面に固着しないような、非固着性のドレッシング材を使用する

### 出血時の対応方法

- ガーゼなどで出血点を圧迫止血する
- 出血点に、ソープサン<sup>®</sup>、サージセル<sup>®</sup>、スポンゼル<sup>®</sup>を貼付する(医師の指示、許可が必要)
- Mohs 変法で出血する部位を硬化させる(医師が実施)

### 処置時の疼痛の対処方法

- 事前に予防的な鎮痛薬を使用する
- ドレッシング材の除去時は濡らしながらゆっくりと丁寧に剥がす
- 洗浄時に疼痛がある場合は、生理食塩水を使用する
- 創面が乾燥しないように、油性基材の軟膏を1日1～2回塗布する
- ガーゼ側に軟膏を塗る
- 表面麻酔薬(キシロカイン<sup>®</sup>スプレー、キシロカイン<sup>®</sup>ゼリー)を使用する
- 処置に時間がかからないようなケア方法をとる

## 皮膚表出がんのケア方法

皮膚に表出したがんは、隆起性の結節で自壊していない場合、刺激を与えないような素材の衣類を着用したり圧迫を加えないゆったりした衣類にしたりします。しかし、腫瘍の表面が自壊した場合や浸潤性の腫瘍は、多くの場合でさまざまな症状が出現します(図2)。この苦痛となる症状について、それぞれのケア方法やポイントについて紹介します。

### 症状別のケア方法

#### 出血

出血は、皮膚表出がんに対応するなかでも管理に難渋する症状です。腫瘍は血流が豊富で脆いため出血しやすく、止血しにくいという特徴があります。